

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

都道府県・政令指定都市【 京都府 】

学校名【 京都府立洛北高等学校 】

<スポーツ庁テーマ>

1 実践テーマ	【 Ⅲ・Ⅴ 】
2 実施対象者	京都府立洛北高等学校 講演会（実技含む） 1年生 280名
3 展開の形式	（1）学校における活動 ① 教科名（ 保健体育 ） ② 行事名（ 人権学習 ） ③ その他（ ） （2）地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 （ねらい）	京都アップス、京都車椅子駅伝チーム監督（日本車椅子バスケットボール連盟強化指導部委員、シドニー・北京パラリンピック日本代表コーチ）である坂野晴男氏を招いて、東京2020パラリンピックを目指している選手とともに、「ともに生きる」というテーマで、人権学習という観点からも実施した。生徒たちが車椅子に乗り、実際に車椅子バスケットボールを対戦するなどの経験を通して、パラリンピックの4つの価値（勇気・強い意志・インスピレーション・公平）や共生ということをしっかりと感じ取らせ、スポーツを通じて人間性を高める。また、車椅子バスケットを体験することによってしてスポーツを楽しむ心を育む。
5 取組内容	令和2年10月9日（金）6時限目 オリパラ推進事業・人権学習 講演会（実技含む）「ともに生きる ～車椅子バスケットボールを通じて～」 講師 京都UPS（アップス）監督 坂野晴男氏 実技指導 京都UPS（アップス）山本英嗣選手・東武志選手 カクテル 阪根康子選手 ギミックス 近藤俊樹選手 レイク滋賀 八橋隆二選手 奈良DEER 川上芳則選手 （1）車椅子バスケットボールを通じて… ① 講演会（実技含む）の内容



(講師の先生方の紹介と車椅子の操作について)

坂野氏から、講師の先生方の紹介や車椅子の扱いについての説明が行われた。初めての体験であることからか、講師の先生方のデモストレーションに興味深く見入っていた。



(1年生全員が実際に車椅子を体験)

その後、講師の先生方の指導の下で、生徒達も車椅子に実際に乗り体験しました。まっすぐ進むことやコーンを回ることなど、コントロールが難しいものだと知ることができました。



(クラス対抗で車椅子バスケットボールの試合を体験)

クラス対抗で車椅子バスケットボールの試合を実施し、1年生の担任チームも参戦し、大いに盛り上がった。



(クラスごと分かれて選手が想いを語った)

実技のあとは、各クラスに1名の選手がついて、これまでの人生や自分の障害について話していただき、生徒の質疑応答に答える時間が設けられた。障害者の方々の思いを聞くことができ、生徒たちの心に残る素晴らしい時間となった。

6主な成果

高校1年生で人権学習もふまえての講演・体験会となった。実際に選手の方々からの体験談を聞くことによって「共に生きる」共生ということを感じ取り、深く考えるきっかけとなった。

	<p>言葉には思いや重みがあり、勇気や強い意志が感じられ、生徒の心に深く響いている様子であった。また、車椅子バスケットを体験することで、よりスポーツへの興味や東京 2020 オリンピックやパラリンピックに関心を持つこととなった。</p> <p>パラリンピックの4つの価値（勇気・強い意志・インスピレーション・公平）の重要性も確認し、自分の人生においても大切であることを知ることができた。</p>
7実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>生徒の心に響くよう、知識を詰め込むだけの取り組みにならないよう、次の2点について工夫した。</p> <p>①生徒全員が車椅子を体験する、体験型学習。</p> <p>②選手の方々の障害についてや、これまでの人生について直接お話をさせていただき、生徒からの質問などディスカッションの時間を設ける。</p>
8主な課題等	<p>生徒達の心に響く貴重な時間となったが、事前学習の時間が限られており、今後は自分達で積極的に学べるような環境を提供する必要がある。また、今後すべての生徒が3年間で1度は経験できるように調整していきたい。</p>
9来年度以降 の実施予定	<p>予算の問題もあるが、できる限り実施の方向で検討したい。東京 2020 終了後に残せる財産として、生徒が主体となって活動ができる事業として継続していきたい。</p>